中牧美林を夢見て

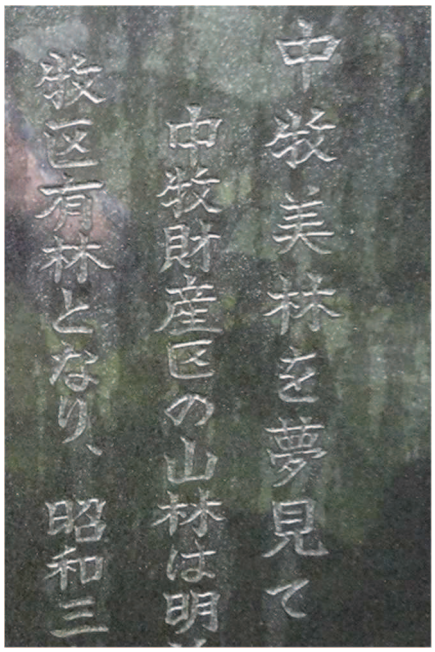
中牧財産区の山林は明治八年の中牧村の村有林から始まり、明治二十二年には牧郷村の中牧区有林となり、昭和三十一年には町村合併によって大岡村へ、さらに平成十七年には長野市になります。この間、地域の森として親しまれ、常に中牧区の人々と共にありました。

かつては広葉樹林として、薪や炭の原料を伐り出し、枝葉は燃料や肥料として田畑に撒くなど利用されていました。

しかし、戦後の建築材としての木材需要を受け、成長がよく寒冷地に適したカラマツが植栽されました。その後、カラマツ林は順調な成長を続けたものの、今のところカラマツ材の価格は低迷しています。

そこで、総面積二百九十五町歩の内十町歩に平成十五年、四十五年生時に四残一伐の列状間伐を行い、その間伐カ所（カラマツの下層）に十メートル間隔でヒノキを植栽しました。間伐して林冠が開いたため広葉樹が発生・成長し、カラマツの下層にヒノキと広葉樹の混交した林が形成されます。このヒノキは周りにある広葉樹の成長が早いため、少ない光を受けながら広葉樹の下でゆっくり成長を続けることが予想されます。上層にあるカラマツを更に熟成させるために施業を進め、ヒノキはなるべく人の手を掛けずに広葉樹と共生させます。

大花見池の周りに初めてヒノキを植栽した年、平成十五年を中牧美林元年とし、今後ヒノキの植栽をはじめとする中牧財産区の山づくりを継続し、三百年後にカラマツ林からヒノキ・広葉樹林が誕生することを夢見て、ここに記念碑を築きます。

平成十六年九月三十日

更級郡大岡村外一町中牧財産区組合